



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 人文學報 2002, 86: 313-334

ISSUE DATE:

2002-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48589>

RIGHT:

彙 報

2001 年（平成 13 年）1 月～2001 年（平成 13 年）12 月

研 究 状 況

I 班 研 究

人文学研究部

帝国の研究

班長 山本有造

冷戦の終了、ソ連邦の崩壊とともに、諸民族・諸地域の間に遠心力が強まり、民族とは何か、国家とは何かがいま新たに問われはじめている。「民族自決に立脚した国民国家」という近代的理念の妥当性が再検討されるなかで、「帝国」という国家統合のあり方についても改めて科学的分析が要求されつつある。

われわれの共同研究班においては、これまでの「マルクス主義的経済帝国主義論」にとらわれることなく、世界史的・比較史的な立場に立って、「帝国」の原理・類型・関係を検討しようとした。

3 年間の研究会を 3 月に終了し、現在最終報告書の作成に入っている。

班員 籠谷直人 菊地暁 小牧幸代 水野直樹 山室信一 安田敏明（以上所内） 杉山正明（文学研究科） 秋田茂（大阪外大） 今田秀作（和歌山大） 王柯（神戸大） 杉原薫（大阪大） 山本正（大阪経済大）

1 月 22 日 報告論文集作成のための打合せ会

全員

2 月 5 日 論文草稿検討会（1）

山本（有）、山本（正）、安田

2 月 26 日 論文草稿検討会（2）

杉原、秋田、籠谷

3 月 12 日 論文草稿検討会（3） 王、小牧

安定社会と言語

班長 横山俊夫

人間社会の安定化と言語の変質とのかかわりの諸相を、生物群集の研究者とともに多面的に解明する。素材にはアジアやヨーロッパの宗教史、芸能史、文学史、科学史上の事例をえらぶ。この課題をかかげるのは現代の科学技術が個としての人間を萎縮させ、地球規模の閉塞社会をもたらしはじめたなかで、それをあかるい安定社会に変えうるのは言語上の工夫ではないかとの想いからである。なお参考資料として、一七世紀後半の日本の色道論を輪読、その言語の質を検討している。

この研究は、話し言葉や名づけをめぐる試行的共同研究「言語力の諸相」（1997-1998）や「新発見事物への名づけをめぐる学内共同のこころみ」（1998）の成果をふまえるとともに、京都ゼミナールハウス主催「京都国際セミナー／安定社会の総合研究」（1989-1999）の蓄積を、さらに発展させることになるだろう。

班員 宇佐美齊 加藤和人 金文京 小林博行 武田時昌 東郷俊宏 森本淳生 I. J. McMullen Thomas Harper Gaye Rowley（以上所内） 山極壽一（理学研究科） 遊磨正秀（生態学研究センター） W. J. Boot（文学研究科） 遠藤彰（立命館大学） 岡田暁生（神戸大学発達科学部） 後藤静夫（国立文楽劇場） 廣瀬千紗子（同志社女子大学） 深澤一幸（大阪大学） 茂手木潔子（上越教育大学）

1 月 20 日 文明の産物・明かり vs 自然の産物・

人 文 学 報

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| | ホタル | 遊磨 正秀 | ゴリラに学ぶこれからの芸術 |
| | 『難波鉦』序、松之部一 | 初冠 | 山極 壽一、樂吉左衛門 |
| | | 武田 時昌 | 6月30日 ヒトゲノム研究の今と言葉 |
| 1月27日 | デカダンスの詩学 | 宇佐美 齊 | 加藤 和人 |
| | 『難波鉦』松之部一 | 初冠～釣針 | 『難波鉦』松之部一 回文～細道 |
| | | 武田 時昌 | 廣瀬千紗子 |
| 2月17日 | 文楽式三人遣いの分析試論 | 後藤 静夫 | 稚立 |
| | 『難波鉦』松之部一 手詰～印問答 | 後藤 静夫 | |
| | | 深澤 一幸 | 7月14日 18世紀の大雑書 ― 文体論的検討 |
| 2月24日 | 平成12年度学長裁量経費（代表 霊長類研究所教授 松沢哲郎） | | 横山 俊夫 |
| | 「人間学・自然学教育の体系化：今西錦司生誕百年記念事業」による人文研特別セミナー | | 『難波鉦』松之部一 埋火～一時雨 |
| | 「現代自然学の言語をめぐる諸問題」（企画・司会：加藤，横山） | | 森本 淳生 |
| | 生物のかたちと数理 ― A. チューリング・稿模様・近藤滋 ― 近藤 滋 | | 10月13日 オペラと安定社会の音楽＝劇言語 |
| | （徳島大学総合科学部教授） | | ― 見出し言葉風に ― |
| 4月21日 | 小林秀雄における「表現」の問題 | | 岡田暁生（神戸大学発達科学部） |
| | 森本 淳生 | | 『難波鉦』松之部一 空礫～火廻 |
| | 『難波鉦』松之部一 大番～後連 | | 宇佐美 齊 |
| | 小林 博行 | | 10月27日 ファーブル『昆虫記』という言説を可能にしたもの |
| 5月19日 | 明治期の安定社会と科学知識（1）― 健康という尺度から ― 武田 時昌 | | 遠藤 彰 |
| | 『難波鉦』松之部一 納戸～衣かづき | | 『難波鉦』松之部一 籠拔～夢契 |
| | 深澤 一幸 | | 横山 俊夫 |
| 5月26日 | 邦楽鑑賞会「三曲と琵琶」 | | 11月10日 〈拡大研究会〉儒学と漢学 ― 江村北海を出発点として ― W. J. Boot |
| | 於：国立文楽劇場，解説：後藤 静夫 | | 11月17日 日本近世演劇のドラマツルギー |
| | 研究報告書作成のための打ち合わせ | | ― 『世界綱目』を読む ― その1 |
| | 全員 | | 廣瀬千紗子 |
| 6月2日 | 近世日本の釋奠 マックマレン， | | 『難波鉦』 森本 淳生 |
| | 論評：小南一郎，古勝隆一 | | 12月1日 色道大鏡，サル編：サルの同性愛論 |
| | 『難波鉦』松之部一 開眼～品定 | | 山極 壽一 |
| | 遠藤 彰 | | 『難波鉦』 加藤 和人 |
| 6月16日 | 性的な場面におけるコミュニケーションの進化 | | 12月15日 清末安定期の文人の言語 |
| | 『難波鉦』松之部一 品定～枕箱 | | 『難波鉦』 金 文京 |
| | 広瀬千紗子 | | |
| 6月24日 | 京都アスニー主催，当研究班後援（司会：横山） | | 日本の植民地支配 ― 朝鮮と台湾 ― |
| | | | 班長 水野直樹 |
- 日本の植民地支配の全体像を解明することをめざして，朝鮮と台湾における植民地政策の比較，日本の政治・経済・社会などとの関連に重点を置いて，研究を進めている。日本史・朝鮮史・台湾史などの研究者による共同研究として，研究の視点，資料の問題などに関して，情報・意見の交換を重ねている。

共同研究最後の年度となったので、まとめについても協議を行った。

班員 籠谷直人 菊地暁 高木博志 山室信一文竣英（外国人共同研究者）李鍾暎（外国人共同研究者）（以上所内）伊藤之雄（法学部）駒込武（教育学部）永井和（文学部）堀和生（経済学部）青野正明（聖和大）浅井良純（天理大非常勤）桂川光正（大阪産業大）河合和男（奈良産業大）河原林直人（大阪市立大・院）北波道子（関西大・院）呉宏明（京都精華大）近藤正己（近畿大）杉原達（大阪大）富山一郎（大阪大）土井浩嗣（神戸大・院）藤永壮（大阪産業大）朴一（大阪市立大）朴宣美（京大・院）本間千景（仏教大・院）松田利彦（日文研）松田吉郎（兵庫教育大）山田敦（学術振興会特別研究員）李昇燁（京大・院）

1月17日 朝鮮における近代司法官僚の形成について—官立法官養成所の卒業生を中心に— 浅井 良純
滋賀県立大学朴慶植文庫について

水野 直樹

2月7日 植民地台湾社における社会事業についてのごく初歩的な整理—1920年代を中心に— 宗田 昌人
日本統治下台湾の教員について

呉 宏明

植民地期朝鮮における教員に関する資料 本間 千景

2月21日 韓国近現代史研究の課題と同化政策 権泰億（ソウル大）

3月7日 「間島出兵」とカナダ長老教会宣教師—カナダ長老教会文書の紹介—

駒込 武

植民地期朝鮮の文化財保護史の研究紹介 高木 博志

4月18日 植民地住民登録制度の成立—台湾の第一回戸口調査と朝鮮の民籍法実施— 水野 直樹
台湾引揚者の戦後—『台湾縁故者人名録』に見る職業変遷—

河原林直人

5月15日 帝国日本の植民地における刑事司法制度の形成 文 竣暎

6月6日 日本の植民地支配と天皇恩赦大権—朝鮮と台湾— 田中 隆一
韓国併合前後における官僚研究の資料について—韓国歴史情報統合システムの紹介— 浅井 良純

6月20日 総力戦期の植民地朝鮮における経済警察 松田 利彦
植民地朝鮮における人絹織物業の発展構造 福岡 正章（京大・院）

7月4日 総力戦期の植民地台湾における経済警察 近藤 正己
『朝鮮総督訓示集成』（仮題、全6巻、緑蔭書房）について 水野 直樹

10月3日 朝鮮総督府中枢院の家族制度観—創氏改名との関連から— 青野 正明
全鮮公職者大会に関する基礎的調査 李 昇燁

10月17日 台湾における旧日本植民地時期歴史研究と人材育成について—大学院の歴史研究科を中心として— 呉 文星（台湾師範大）
資料紹介：上山満之進関係文書

河合 和男

11月7日 戦前キリスト教宣教師による東アジア女子教育事業と朝鮮人女子日本留学 朴 宣美

植民地朝鮮における警察犯処罰規則に関する研究—日本/台湾との比較調査— 李 鍾暎

11月21日 台湾総督府官僚の来歴について やまだ あつし

植民地台湾における公娼制度・再論 藤永 壮

12月5日 植民地期朝鮮における日本人教員リクルート—初等教育機関を中心に— 本間 千景
日本統治下台湾の教員について

呉 宏明

12月19日 朝鮮美術史の成立・試論 高木 博志

近代日本の君主制と朝鮮 ― 王公族・
朝鮮貴族をめぐる政治とイメージ：
1904～1932 ― 伊藤 之雄

明治維新期の社会と情報

班長 佐々木克

明治維新期は、おおまかに幕末の旧体制崩壊期と、明治の新国家建設期に二分できる。しかし何れにしても、変革期であり動乱期である。権力は動揺し、社会は流動化し人が激しく動き、そして噂・流説などさまざまな情報が飛びかう。そこで、権力も組織も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも発信してゆく。幕府や藩当局は、それぞれ独自の情報蒐集システムを持っていた。しかし、伝統のシステムだけでは、新たな状況に対応できなくなる。また幕府は政治や外交に関しては、情報統制を基本としてきたが、それが崩れていく。そうしたなかで、知識人や在村のエリート達が、独自のネットワークをもって、情報の蒐集・発信主体として登場し、権力の側は、彼らの存在を無視できなくなる。こうした状況は基本的には、明治期に引き継がれるが、新たな問題も登場する。それは明治政府が、権力が内包する根源的病として、情報を秘匿・隠匿しようとする基本的性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に伝えなければならない情報を、如何に早くかつ広く伝達・徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題に直面するのであり、こうした状況のなかで、民衆自体も、新たな課題に就くことを迫られるのである。本研究は、以上のような実態をふまえて、明治維新という変革期における〈情報〉にかかわる諸問題を、総合的に検討しようとする意図しているものである。

班員 落合弘樹 高木博志 高階絵里加（以上所内）永井和（文学研究科）青山忠正（佛教大）奥村弘（神戸大）長志珠絵（神戸市外大）小股憲明（大阪女子大）勝部真人（広島大）岸本覚（鳥取大）小林丈広（京都市歴史資料館）斎藤祐司（彦根城博物館）鈴木栄樹（京都薬大）鈴木祥二（名古屋大）谷山正道（天理大）塚本明（三重大）原田敬一（佛教大）福井純子（立命館大）三澤純（熊本大）母利美和（彦根城博物館）藪田貫（関西大）山崎有恒（立命館大）笹部昌利（佛教大・非）黒田信二（広島大・院）谷川穰（京都大・院）松延眞介（佛教大・院）

- 1月26日 開国期における幕府の「外交」政策の特質について ― いわゆる「下田三箇条」を中心に ― 麓 慎一
- 2月16日 前島密「漢字御廃止之議」という資料をめぐる 長 志珠絵
- 3月16日 太政官文書よりみた天皇親裁の成立 永井 和
- 4月20日 島津久光の登場と大久保利通 佐々木 克
- 6月1日 旧鹿児島藩協力高問題について 落合 弘樹
- 6月29日 近世の禁裏空間・近代の京都御苑 高木 博志
- 7月24日 近世後期大名の神格化 ― 細川家永青文庫の史料紹介 ― 岸本 覚
- 9月21日 近代天皇像の形成 佐々木 克
- 10月12日 彦根・土浦両藩とオランダ風説書 佐藤 隆一
- 11月2日 「奇人」の明治維新 ― 佐田介石の思想と行動 ― 谷川 穰
- 12月7日 幕末異国人情報と伊勢神宮 塚本 明
- 12月14日 明治初期における立憲制導入と宮中 黒田 信二

文化相渉活動の諸相とその担い手 班長 山室信一

本研究は複数の社会空間をまたがる文化の出会いと繋がり、そして反発・摩擦などの諸相を分析、そこから地域文化と世界文化の編成の意義を探ることを課題として出発し、文化連関という研究分野と分析枠組みの創出をめざしている。この文化連関学とでもいうべき領域のデザインをいかに描くかを求めて、既存の学問分野や理論がいかなるものでもあり、また何がフロンティアとしてありうるかについて検討を進めることが当面の課題となる。そのため、班員の専門や研究対象についてその達成と問題点を検討した昨年度の成果を踏まえて本年度は、文化研究の方法論や文化相渉の担い手なる個人や調査機関について採り上げ新分野の可能性について議論を重ねた。

また、この共同研究では、文化相渉活動の担い手

としての学術調査機関やシンクタンクによって集積された情報を分析していくことも重要な課題として設定しており、東亜研究所の刊行物や旧制高等商業学校の蔵書などに関する基礎的史料の調査と整理も併せて行った。

班員 落合弘樹 籠谷直人 菊地暁 坂本優一郎
高木博志 高階絵里加 竹沢泰子 山本有造（以上所内） 蘭信三（留学生センター） 早瀬晋三（大阪市立大） 加藤雄三（人文研・非常勤研究員） 河原林直人（籠谷大） 小林啓治（京都府立大） 田中隆一（日本学術振興会特別研究員） 鶴見太郎（京都橘女子大） Michael Jaments（立命館大） モール・亀谷百合佳（同志社大） 盛田良治（大阪産業大） 酒井一臣（阪大文・院） 坂部晶子 承志（以上京大文・院） 本間千景（仏大文・院）

1月12日 東亜研究所について — 東研刊行物の米国議会図書館所蔵状況および「支那慣行調査」 — 井村 哲郎

3月9日 第二次大戦における「抵抗」の呼称について — 日本とフランスを中心とした比較考察 — 亀谷百合佳

4月23日 文化事業と国際政治の相克 山室 信一

5月14日 国際社会学の可能性 — 梶田孝道編『国際社会学』を読む — 蘭 信三
投機と投資 — 18世紀のロンドン・シティ 坂本優一郎

5月28日 紹介：平野健一郎『国際文化論』 山本 有造
満洲國建国大学について 田中 隆一

6月1日 旧満洲体験を語る 中 久郎

6月25日 書評：『日本人のアフリカ発見』 酒井 一臣
海域東南アジア東部世界論 早瀬 晋三

7月9日 書評：石堂清倫『わが異端の昭和史』 鶴見 太郎
芳賀日出男論序説 — ある民俗写真家の「日本」体験 — 菊地 暁

9月17日 中江兆民の国小主義と明治日本の選択 夏 晶

10月15日 書評：グレアム・ターナー『カルチュラル・スタディーズ入門』

高階絵里加
満洲国協和会の青年文化運動と徴兵制 — 「在満朝鮮人」政策との関連で —

田中 隆一
10月22日 書評：『知の教科書・ウォーラステイン』 坂本優一郎
南洋協会について 河原林直人

11月12日 書評：杉本エツ子『武士の娘』 鶴見 太郎
比律賓協会 — 『復刻版比律賓情報』

解説から — 早瀬 晋三

11月26日 大谷光瑞について 山室 信一
帝国と国際法 小林 啓治

12月10日 文化の境界付けとその政治的含意 山室 信一
早乙女雅博「新羅の考古学的調査〈100年〉の研究」

高木 博志

アヴァンギャルド芸術の研究 班長 宇佐美齊
1997年から2001年にいたる4年間の予定で発足した共同研究班である。

20世紀初頭において芸術概念と表現理論とを大きく転換させた、いわゆるアヴァンギャルド芸術を今日的な視点から総合的に再検討することを主眼とする。その場合、文学・美術・音楽・演劇・映画など諸ジャンル相互間の関わり、科学技術の進展、また政治経済や社会の変動が及ぼした影響、そして思想史的なコンテクストなどに留意しなければならないことはもちろんであるが、同時にこの運動においては世界的な並行現象ないしは波及効果が見られる点を十分に考慮して、西ヨーロッパのみを視野に収めるのではなく、日本・中国・ロシア・アメリカ・その他の諸国との比較対照の視点をも重視した。時代区分としては、20世紀初頭から30年代までを中心に取り扱った。研究会は原則として隔週に開催し、すでに3年半にわたって口頭発表と討議とを積み重ねてきたが、最終年度に当たる2000年度の夏以降は論文執筆にとりかかり、秋からは原稿検討会

および編集作業を積み重ねた。

なお本研究の成果報告書は、『アヴァンギャルドの世紀』と題して、2001年11月に京都大学学術出版会から刊行された。

班員 井波陵一 大浦康介 森本淳生（以上所内） 篠原資明 松島征 三好郁朗（以上総合人間学部） 吉田城（文学部） 鈴木貞美（国際日文研） 丹治恆次郎（関西学院大学法学部） ビエール・ドゥヴォー（甲南女子大学文学部） 水田恭平（神戸大学国際文化部） 永田靖（大阪大学文学部） 禹朋子（帝塚山学院大学文学部）

1月15日	原稿検討会・編集作業	全員
1月29日	原稿検討会・編集作業	全員
2月19日	原稿検討会・編集作業	全員
3月5日	原稿検討会・編集作業	全員
3月19日	原稿検討会・編集作業	全員

空間と移動の社会史

班長 前川和也

この研究班は、1998年春いろいろ、ヨーロッパ、東アジア、西アジアの前工業化諸社会におけるヒトやモノの移動、情報あるいは制度の移転、伝達、そしてそのような移動を可能にしたトポスといった問題を包括的にあつかってきた。自立的、閉鎖的とみられがちな社会に住む人びとが、じっさいには境界外の世界についての情報をいかに豊富にもっていたか、またいかに頻繁に境界外に赴いていたかが明らかにされたとおもわれる。研究班は2001年3月で解散し、そして報告書出版のための諸原稿が2002年初夏までに提出される予定である。

班員 小山哲 阪上孝 高田京比子 富永茂樹 横山俊夫（以上所内） 川島昭夫（総合人間学部） 服部良久 南川高志（以上文学部） 阿河雄二郎（大阪外大） 井上光子（関西学院大） 井上浩一 大黒俊二（以上大阪市大） 江川温 川北稔（以上大阪大） 河村貞枝 川分圭子 橋本伸也 渡辺伸（以上京都府大） 川本正知（奈良産業大） 合田昌史（甲南大学） 渋谷聡（島根大） 田中俊之（金沢大） 三成美保（攝南大） 森明子（国立民博） 山辺規子（奈良女子大） 脇田晴子（滋賀県大） 桜井康人（文学部・院） 中村敦子（文学部研修員）

1月9日 11世紀ビザンツ貴族反乱の地域構造

井上 浩一

1月23日 日本中世の商人と商品の移動と空間

脇田 晴子

サーマヴェーダ基礎資料集成

班長 藤井正人

ヴェーダ文献の中で祭式歌詠を内容とするサーマヴェーダの文字資料を統一的に整理し編集することによって、サーマヴェーダの基礎資料を集成することがこの共同研究の目的である。未出版のジャイミニヤ派サーマヴェーダの各種写本を中心に研究を進めるが、他派の伝承をも対象に含める。文献学、祭式学、音楽学をそれぞれの専門とする研究者の国際的な協力のもとに行なうサーマヴェーダの総合研究の第一段階として、サーマヴェーダ全体の総索引の出版を当面の目標としている。研究形態は、各班員が資料の担当を分けて行なう分業と、班員間の作業の調整と内容の検討を行なうミーティングの二つからなる。この研究班はサーマヴェーダに関する専門知識を次世代に伝えることも意図しているので、若い研究者を班員に加えている。研究成果の一部として、サーマヴェーダの現存伝承と基礎資料に関する予備的な目録を作成した。

班員 井狩彌介（所内） 永ノ尾信悟（東京大） アスコ・バルボラ（ヘルシンキ大） ウェイン・ホワード 梶原三恵子（ハーヴァード大・院） 野田智子 村川晶子（以上京大・院）

インド文化史の諸問題 — テクスト伝承と写本 —

班長 井狩彌介

1999年4月に発足した本研究は、2001年3月に終了した。その目標は、南アジアの多言語社会においてリングフランカ（共通語）としてのサンスクリットのテキスト伝承を扱う場合の諸問題を具体的に検討することに置かれた。伝承の過程において生じる時間的要因（言語体系の歴史的変遷）と地域的要因（各地域における地方語音韻の影響と写本文字の変容）とによるテキスト変容の可能性はサンスクリット写本の伝承を扱う場合に常に重要な検討課題となる。本研究では、ヴェーダ文献の伝承、特に南インド・ケララ地域の写本と口頭伝承資料に焦点をあて、ヴェーダ文献伝承の諸特徴を分析しつつテク

ストの批判刊本を作成するために必要な前提知識を総括することに重点が置かれた。近年に現地調査により新しく発見されたヤジュルヴェーダ所属のヴァードゥーラ派とサーマヴェーダ所属のジャイミニャ派の諸写本を対象として、ケララ地域の現存マラーラム文字写本のヴェーダ文献写本の歴史的な変遷とその音韻、表記の特徴を討議して総括した。成果は英文資料報告書として公刊に向け作業中である。

班員 荒牧典俊 藤井正人 アスコ・パルボラ (以上所内) 徳永宗雄 (文学部) 村上昌孝 (非) 山下 勤 (京都学院大) 増田良介 (大阪外大・非) 松矢野道雄 (京都産大) 梶原三恵子 (日本学術振興会) 野田智子 村川章子 (以上京大・文・D.C.) 杉田瑞枝 (京大研修員)

1月26日 ヴァードゥーラ学派マラーラム新写本の表記特徴(2) 井狩
2月9日 ジャイミニャ派の現存伝承とその分布 藤井

テキストの政治学

— 危機の時代における理論と批評 —

班長 森本淳生

20世紀の前半期は、近代的な人間諸科学の「危機」が表面化し、その克服をめぐる言説がさまざまな領域で浮上してきた時代であった。しかしこれらの言説には、近代みずから自己自身のありようを反省するという屈折した自己意識の構造が、きわめて先鋭的なかたちで表現されているといってもよいだろう。こうしたテキストのねじれを解きほぐしながら、それらの言説に刻印された近代的な思考の回路を明らかにし、それが近代社会のありようとどのように絡み合っているのかを検証すること——これが本研究班の基本的なねらいである。哲学、社会理論から科学論、さらには文学・芸術批評にいたるまでの当時の「危機」をめぐるテキストを、洋の東西を問わず精査することから本研究会は出発したが、前年度はさらに照準を「一九三〇年代日本」に絞り込み、より精密な研究を試みた。三年目にあたる本年度は、報告書の出版を視野にいれながら論文の執筆をめざすとともに、各班員の視点間にどのような

有機的関係を構築しうるのはか模索中である。

班員 落合弘樹 菊地暁 北垣徹 小林博行 小牧幸代 坂本優一郎 (以上、所内) 岡真理 (総合人間学部) 田辺明生 (アジア・アフリカ地域研究科) 飯田祐子 (神戸女学院大) 上野成利 (神戸大) 崎山政毅 田崎英明 (以上、立命館大) 辰巳伸知 (仏教大) 細見和之 (大阪府立大) 水嶋一憲 盛田良治 (以上、大阪産業大) 安田敏朗 (一橋大)

1月27日 1930年代における農本主義と文明論
橋孝三郎の不可解さをめぐって 小林
2月17日 尾崎秀美の〈東亜新秩序〉論— 日中戦争期におけるアジア論のポリティクス 米谷匡史 (東京外国語大学)
3月2日 2000年度の議論の総括 上野
3月10日 ケヴィン・マイケル・ドーク『日本浪漫派とナショナリズム』 細見・ドーク

4月18日 全体の方向性をめぐって 森本
4月28日 丸山真男『日本の思想』(第2章「近代日本の思想と文学」) 上野
小林秀雄における1930年代— 批評の内面化のプロセス 森本
5月19日 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史 1931～1945年』 上野・森本
「風土」と国文学—『国体の本義』と久松潜一 安田
6月13日 序論準備会 森本
6月23日 竹内好「日本のアジア主義」 崎山
中井正一の1930年代— 集団的コミュニケーションの構想と実践 門部昌志 (長崎シーボルト大学)
6月27日 序論準備会 上野・森本
7月22日 今後の方向性をめぐって 上野・森本
10月26日 Hayden White, Metahistory, Introduction 菊池・森本
10月27日 国民国家と政治神学— 南原繁と田辺元・再論 上野
11月10日 全体のモチーフについて 全員
1930年代の清水幾太郎—「個人主義」の迷走 辰巳
12月2日 戸坂潤『日本イデオロギー論』

森本・上野・崎山・辰巳
八月のゼミナール― 柳田国男編『日
本民俗学研究』の解剖学― 菊地

ポルノグラフィ研究

― エロスとその表象をめぐる ―

班長 大浦康介

本研究は、文学テキスト、絵画、写真、映画、ビデオ、コミックなど、さまざまな媒体をつかった性表象の分析をつうじて、エロスの内実とその表象可能性や、それらの表象を横断する〈主体〉、〈社会〉、〈民族〉、〈国家〉、〈性差〉、〈宗教〉、〈倫理〉などの問題を考えることを目的とする。近代ヨーロッパにおける「ポルノグラフィの発明」をひとつの目安として、日本近現代の性表象・性文化や中国、アメリカの事例などを検討しつつ、この分野での新たな理論的地平を模索したい。期間は三年。原則として月二回の会合をもつ。最終年度にあたる2001年の秋からは、報告書作成に向けた原稿検討会を開いている。

班員 北垣徹 金文京 田中雅一 東郷俊宏（以上所内） 小野原教子（神戸商大） 川村清志（人文研研修員） 北原恵（甲南大） 小西嘉幸（大阪市大） 小山俊輔（奈良女子大） 関谷一彦（関西学院大） 棚橋訓（都立大） 早川聞多（日文研） 古川誠（関西大） 山路龍太（同志社大） 山本和明（相愛女子短大） 河田学 山口威（以上京大人環・院） 片平幸 渡辺綾香（以上総研大・院） 下野理恵（同志社大・院） 藤本純子（大阪大・院） 圓田浩二（関西学院大・院）

1月17日 啼くのか啼かないのか―SとMの間を彷徨う言葉たち 東郷 俊宏

2月7日 幻想の浪声（よがりごえ） 山本 和明

2月24日 レディースコミック論 藤本由香里（ゲスト）

3月21日 中国春画における空間と肉体 中野美代子（ゲスト）

4月4日 ポルノと春画のあいだ リチャード・レイン（ゲスト）

5月26日 研究報告作成に向けて 大浦 康介

6月6日 「地獄」のポルノグラフィー 北垣 徹

6月20日 「変態性欲」の変遷・変容・拡散 斎藤光（ゲスト）

10月3日 17世紀中国のポルノ文学―『童婉争奇』をめぐる 金 文京

10月17日 原稿検討会（「幻想の浪声」） 山本 和明

11月7日 原稿検討会（「女が男×男を愛するとき」） 藤本 純子

11月21日 原稿検討会（「AV論」） 小山 俊輔

12月5日 原稿検討会（「現代日本の「風俗」―ヌクから癒しへ」） 圓田 浩二

12月19日 原稿検討会（「フィクションとしてのポルノグラフィ」） 河田 学

フェティシズム研究の射程

班長 田中雅一

『儀礼的暴力の研究』『主体・自己・情動構築の文化的特質』に続く研究会。ものとそれに関わる人との関係をテーマとする。フェティシズムあるいはフェティッシュをキーワードに文化横断的かつ領域横断的に議論を展開していきたい。ここでのアプローチは宗教学、経済学、歴史学、精神分析、性科学、フェミニズム研究、物質文化論など多岐にわたる。初年度では基本文献の紹介を兼ねた報告を中心とし、二年目の今年は各自の研究テーマに関連する報告が中心であった。

班員 菊地暁 小牧幸代 大浦康介 阪上孝 高木博志 竹沢泰子（以上所内） 速水洋子（東南アジアセンター） 足立明 田辺明生 保坂実千代（以上AA地域研） 松田素二（文学研究科） 荻野美穂 川村邦光 春日直樹（以上大阪大学） 中谷文美（岡山大学） 岡田浩樹（甲子園大） 窪田幸子（広島大学） 齊藤光（精華大学） 佐伯順子（帝塚山学院） 崎山政毅（立命館大） 田村公江（龍谷大） 細谷広美（神戸大） 箭内匡（天理大学） 宇城輝人（人文研非常勤研究員） 池亀彩 石井美保 金谷美和 川村清志 中谷純江（以上人文研研修員） 下野理恵（同志社大学大学院アメリカ研究所） 後藤正憲（大阪大学大学院人間科学研究科） 藤本純子（大阪大学大学院文学研究科） 岩谷彩子 佐

藤知久 佐藤木綿子 島蘭洋介 松嶋健 (以上京都
大学大学院人間・環境学研究科)

1月15日 文学テキストにみるフェティシズム

大浦 康介

2月5日 臓器移植とアイデンティティ

出口顕 (島根大学)

2月19日 「御物」というコレクション, 「国宝」
というコレクション — 近代日本の価
値づけ

高木 博志

3月5日 糞掃衣と金欄袈裟

松村 薫子 (総研大院)

3月19日 性的フェティシズム概念の移入 — 拡
散史への予備的考察

斉藤 光

4月16日 かたどられる神とかたる神 — ガーナ
南部の精霊とグドウ祭祀

石井 美保

5月21日 イスラームの聖遺物とフェティシズム
— 北インドの事例

小牧 幸代

6月18日 フェティシズムをめぐる文学と映画
— 谷崎潤一郎『痴人の愛』を中心に

佐伯 順子

7月2日 性の展示 — 秘宝館研究事始め

田中 雅一

7月23日 “Fetish” for whom? — 「アジアの手
仕事」のエスノグラフィー試論

中谷 文美

10月1日 Dialogical Fetishism — アンデスに
おける奇跡と巡礼

細谷 広美

10月15日 増殖するモノたち — 韓国仏教の現在

岡田 浩樹

11月5日 「ザクとは違うのだよ, ザクとは」 —
我々が世代のフェティシズム: ガンプ
ラ編

川村 清志

11月19日 消費される虚構 / 現在 — 〈上杉祭り〉
にムラがる女性たちを事例として

藤本 純子

12月3日 最も美に近い創造物 — Drag Queen
について

佐藤 和久

12月17日 戦後沖縄における死者, 位牌, 国家補
償

成定洋子 (エディンバラ大大学院)

「進化論」と社会

班長 阪上孝

「進化論」的な思考様式は一九世紀後半以降の社
会と学問の枠組そのものに深く根をおろしていると
いってよいだろう。「進化論」がさまざまな社会と
学問分野でどのように理解・受容・批判されていっ
たのかを比較検討することで, 近現代の社会・文
化・学問のありかたを, その問題性もふくめて明ら
かにすること, これが本研究班の基本的なねらいで
ある。

前年度は狭義の進化学説の文化的・社会的な含意
を検討するとともに, 哲学・法学・経済学・社会
学・人類学といった人文・社会科学分野にみられる
進化論的な思考の諸相を分析した。こうした一連の
検討作業において, たとえば「進化論」にふくまれ
る〈進化〉の問題系と〈集団〉の問題系との錯綜な
どが, あらためて議論の的ともなった。本年度は最
終年度となるので, 研究報告書の作成を見据えて,
各班員が執筆を予定している論文にかんする報告を
中心に, 検討を進めている。

班員 加藤和人 北垣徹 小林博行 竹沢泰子
武田時昌 田中雅一 富永茂樹, 山室信一 (以上所
内) 小山哲 (文学研究科) 大澤真幸 (人間・環境
学研究科) 大東祥孝 (留学生センター) 八木紀一
郎 (経済学研究科) 上野成利 (神戸大) 宇城輝人
(人文研非常勤研究員) 小川眞里子 (三重大) 川
越修 (同志社大) 小林清一 (滋賀県立大) 斎藤光
(京都精華大) 佐倉統 (東京大) 白鳥義彦 (神戸
大) 瀧井一博 (神戸商科大) 姫野順一 (長崎大)
前川真行 (大阪女子大) 光永雅明 (神戸市外大)
横山輝雄 (南山大)

1月26日 社会ダーウィニズムとは何だったのか
— 19世紀後半フランス

北垣 徹

3月23日 社会学と優生学

市野川容孝 (東京大)

4月13日 まとめの方向

阪上 孝

4月27日 近代日本の科学知識と進化論 (一)

武田 時昌

5月11日 JT 生命誌研究館見学会

5月25日 イギリス世紀転換期の優生学と新自由
主義 — 社会進化論の諸類型

姫野 順一

- 6月8日 群れの記憶—ゴルトン試論・二 宇城 輝人
- 6月22日 社会生物学の二五年間—ダーウィ
ン・ウォーズはなぜなくなる
か? 佐倉 統
- 7月13日 動物社会と人間社会—エスピナス
『動物社会』をめぐる 白鳥 義彦
- 9月14日 スペンサー=ヴァイスマン論争 1893
-95 小林 博行
- 9月28日 社会経済体制の進化とガヴァナンス
八木紀一郎
- 10月19日 人種とナショナリズム—アメリカの
場合 小林 清一
- 10月26日 進化論の衝撃とは何であったか
横山 輝雄
- 11月9日 多細胞生物と社会・国家—基本〈構
造〉と変異—石川千代松の進化論・
生物論的思想の構造あるいは無構造
斎藤 光
- 11月30日 必然としての進化の操作—生命科学
の方法論と還元主義の意味について考
える 加藤 和人
- 1960年代の研究 班長 富永茂樹
- 1960年代は、われわれの生活と意識がそれまで
のものから大きく変化した時代であった。しかもそ
の変化は世界的な規模で生じたこと、また生活のさ
まざまな領域において認められること、さらに日本
についていうなら、明治維新や第二次世界大戦後の
変化を上回るものであるかもしれないことさえ予想
される、そのような変化である。自身がそのいくぶ
んかを生きた時代、また現在からほど遠くない時代
について何ごとかを語り、結論を抽出するのはけっ
して容易なことではない。だが1960年代をつうじ
ての世界の変貌が、今われわれのいる世界に直接に
つながっているかぎりにおいて、その腑分けを行う
ことはわれわれ自身を知るうえでぜひとも必要な作
業でもある。この共同研究は、以上のような認識に
立って、政治史や経済史もさることながら、日常生
活から学術や芸術にまでいたる多様な側面での世界
の変化に注目して、また1940年代生まれの、いわ
- ば60年代を生きた世代から、70年代生まれの、つ
まりこの時代については語られた記憶しかもたない
世代までが集まって進めてゆくものである。
- 班員：籠谷直人 加藤和人 北垣徹 佐々木克
山室信一（以上所内）伊從勉（人間・環境学研究
科）大澤真幸（人間・環境学研究科）葛山泰央
（人間・環境学研究科）加藤幹郎（総合人間学部）
宇城輝人（人文研非常勤研究員）遠藤徹（同志社
大）川崎博史（ホロニック）斎藤光（京都精華
大）白鳥義彦（神戸大）大黒弘慈（龍谷大）鳴
海邦碩（大阪大）成実弘至（京都造形芸術大）半
田章二（シー・ディー・アイ）足田正博
（シー・ディー・アイ）前川真行（大阪女子大）
松本日之春（京都市芸術大）光永雅明（神戸市外
語大）森口邦彦（社団法人日本工芸会）
- 4月20日 社会学の60年代—日本とフランス
富永 茂樹
- 5月18日 柔らかな都市の可能性—60年代後半
から70年代初めにかけての空気構造
流行の文化的背景について
遠藤 徹
- 6月1日 ポップ・アートと素材の問題
フロランス・ド・メールデュ
（パリ第11大学）
- 6月15日 京都・パリ・京都/1963-1966
森口 邦彦
- 6月29日 来るべき都市と公共空間の危機—モ
ニュメントとしての都市からヴァー
チャル・シティへ
マルセル・エナフ
（カリフォルニア大学サンディエゴ校）
- 7月27日 家庭電化 足田 正博
- 9月21日 シリコンの夢 川崎 博史
- 10月5日 純愛・純潔・フリーセックス
斎藤 光
- 10月12日 パリ—1968
フランソワ・ジェスマン
（ディジョン美術学校）
- 11月2日 1960年代と/のロールズ
川本隆史（東北大）
- 11月16日 身体・モード・若者 成実 弘至

12月7日 〈大映〉帝国の緩やかな崩壊

加藤 幹郎

12月21日 コンピュータミュージックの揺籃期と
その後

松本日之春

ヴェーダ後期の言語と宗教

— ヴァードゥーラ・アヌアーキアーナの研究 —

班長 井狩彌介

ヴェーダ後期の祭式解釈文献（いわゆるブラーフマナ文献）のうち、言語的にも宗教的にもきわめて興味深く重要な文献である『ヴァードゥーラ・アヌアーキアーナ』を会読し、このテキストの言語的特徴とヴェーダ祭式思想史における位置付けを解明することが本研究の目的である。

ヤジュルヴェーダの古学派であるヴァードゥーラ派の文献は、研究史上でつとに注目を浴びてきたにもかかわらず、基本資料となる写本の不備のためにその全容の解明が充分に行われないうちに現在に至ってきた。近年に班長・井狩が南インドで発見した多数の新写本群に基づいて学界未知の文献を含む重要基本文献の本文批評の作成が現在進行中であり、研究史の新たな書き換えに至る知見が蓄積されつつある。本研究はその一環として、同学派文献のうち国際学界でもっとも要請の大きいテキストを、インド文学各分野の研究者を集めて隔週での共同研究を進めている。研究成果は、同テキストの各章ごとに、批判テキストと詳細な訳注を施した英訳を作成した上で、さしあたりインターネット上で公開し、国際学界に報告する予定である。

班員 藤井正人 船山徹 堂山英次郎（以上所内） 徳永宗雄 赤松明彦 ウェルナー・クノープル（以上文学研究科） 荒牧典俊（大谷大） 榎本文雄 天野恭子（以上大阪大） 桂紹隆（広島大） 後藤敏文（東北大） 杉田瑞枝 野田智子（日本学術振興会） 林隆夫（同志社大） 増田良介（大阪外大・非常勤） 村上昌孝（大谷大・非常勤） 八木徹（大阪学院大） 山下勤（京都学院大） 渡瀬信之（東海大） 大島智靖（大阪大文院） 手嶋英貴（東大文院） 永田啓介（京都大文院）

国家形成の比較研究

班長 前川和也

メソポタミア、インド、中国、日本、南米、そして太平洋島嶼部といった諸地域国家形成、とりわけ「古代」国家形成のプロセスについて、文献学、考古学、そして人類学の立場から自由な議論を展開しようと思う。この問題にかんして、近年、世界各地で考古学上の重要な知見が得られつつあるし、また、従来提出されていた諸理論モデルも、もはやおおくの点で再検討を加えなければならないということが、いまや共通に理解されつつあるからである。ところで最近の考古学発掘の進展、利用できる文献史料の増大は、大量の新情報をわれわれにもたらし、同時に、考古学研究、古代史研究の極端な細分化・専門化を生み出している。われわれは「国家成立」という大テーマを掲げることで、そのような研究の細分化に、あえて立ち向かってみたい。研究班は4年間組織される。

班員 井狩弥介 岡村秀典 小南一郎 堂上栄次郎 藤井律之 藤井正人（以上所内） 伊藤淳史 吉井秀夫（以上文学部） 田辺明生（アジア・アフリカ研究科） 宇野隆夫（日文研） 河野一隆（京都府埋文センター） 桑原久男（天理大） 関雄二（国立民博） 寺前直人 福永伸哉（以上大阪大） 西江清高（南山大） 菱田哲郎 渡辺信一郎（以上京都府大） 深澤芳樹（奈良文化財研究所） 松木武彦（岡山大） 森下章司（大手前大） 石村智 下垣仁志 橋本英将（以上京大文・院） 中谷正和（総合研究大学院大・文化科学・院）

4月10日 研究方針討論 全員

古代メソポタミアのセトルメントパターン研究と国家形成の理論（アダムズを中心に） 前川 和也

4月24日 殷・西周王権と都市 岡村 秀典

5月8日 周の建国と封建 小南 一郎

5月22日 日本列島における国家形成のはじまり
弥生～古墳時代の社会変化

松木 武彦

6月12日 日本列島の第2次国家形成 考古学の
発言力を検証する 宇野 隆夫

6月26日 古代アンデスにおける国家形成前段階
関 雄二

- 7月10日 倭王権から倭国へ 対外契機と社会変化 河野 一隆
- 9月11日 国家形成前夜の地域動態 弥生～古墳時代の京都府南部（旧山城国）の事例から 伊藤 淳史
- 9月25日 中国古代国家形成論の現状と若干の私見 渡辺信一郎
- 10月9日 日本古代の宗教政策と国家形成 菱田 哲郎
- 10月23日 北魏前朝史の再検討に向けて 文成帝南巡碑から 藤井 律之
- 11月13日 島嶼における社会進化と環境 石村 智
- 11月27日 考古学からみた大和政権の成立過程 福永 伸哉
- 12月11日 南レバントにおける都市の形成と展開 桑原 久男

東方学研究部

中国美術の図像学

班長 曾布川寛

古代、中世の美術において表現されたものは全て象徴的意味内容を有しており、それが何を表しているかを知ることなしに作品の理解はあり得ない。作品の背景には神話伝説、宗教的義軌、社会的情况などがあり、それらを踏まえて理解することが要求される。我々は中国の古代、中世美術を取り上げるに当たり、図像学の見地から考察を試みる。主たる対象は考古学的出土文物と、石窟寺院などの佛教美術であり、中国のみならず、インド、朝鮮、日本を含めて考察する。

訳経僧伝研究

班長 栗山正進

訳経僧とは、インドや中央アジアから中国にやってきて、經典漢訳に参画した仏教僧である。かれらに関する情報は『高僧伝』『統高僧伝』『宋高僧伝』などに編纂されている。これらの伝記を班員の専門分野である歴史、言語、宗教、美術など多角視点をもって読解検討し、四世紀～八世紀の、中央アジアから南アジアにわたる地域の歴史、文化、その他おおくの情報を引き出すことを目的とする。あわせて

拠るべき現代語訳を作成する。研究会は隔週の月曜日（2時～5時）に漢字情報研究センター会議室で開催。

十六・十七世紀アジアにおける言語接触

班長 高田時雄

本研究班ではポルトガル勢力のアジア東漸を契機として起こった言語接触の諸相を、ジェズイットを初めとするカトリック諸会派の資料を中心として解明することを目指す。本年度は、前年度に引き続き、マニラのドミニコ会が一五九三年に刊行したタガログ語版ドチリナの会読を行ってきた。班員の専門分野である言語・文学・歴史・宗教などの多角的視点をもって読解・討議を行い、拠るべき現代語訳（日本語および英語）と詳細な注を作成中である。研究成果は近く報告書として取りまとめる予定である。

中国技術の伝統

班長 田中淡

「中国技術史の研究」に引き続いて、一九九六年から、中国技術の伝統と特質について検討を加えている。基本的には生活科学技術を中心とするが、しかし前研究班の過程で離れながらみえてきた中国技術史における研究課題は、特定の時代、分野に偏重しない。一般的には、技術と科学の相関、技術者と社会、生活科学の特質、少数民族の技術、等々の主題に関わるであろうし、個別的には、農業、医学、土木建築、紡績、数学、天文学、化学、その他の領域に広がるであろう。会読のテキストとしては、引き続いて元・王禎の『農書』農器図譜の訳注作成をすすめてゆく。並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を随時おこなう。

標記の期間に、王禎『農書』農器図譜・麻苧門、及び雑録の訳注を、佐藤実、東郷俊宏が担当した。

中国文明の形成

班長 小南一郎

二年目になる当研究班では、前年に引き続いて、王国維『観堂集林』の会読を行ない、本文の訳注を作るとともに、尚書や詩経のテキスト形成経過や、甲骨文・金文など出土資料と文献資料との文体的な比較などの問題について認識を深めた。

三国時代の出土文字資料 班長 井波陵一、富谷至

本研究班では、前年度に引き続き、本研究所所蔵の魏晋時代の文字拓本の会読を継続し、HP上での公開に向けて、釈文・典故等の検討を行った。また、前年度検討した三国・呉「走馬樓簡」を長沙において（ほんのごく一部ではあるが）実見する機会を得た。前年度は図版だけが手がかりであったため、書式・筆跡などの古文書学的手法による検討に終始していたが、図版からは知り得ない木簡の断面や厚みを目の当たりにし、木簡の形状から再検討する必要性を痛感した。今後の当研究班の課題である。

なお、当研究班で会読している拓本は、本研究所付属、漢字情報研究センター HP において公開されている。

* 石刻拓本資料

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db/takuhon>

中国近代化の動態構造

班長 森時彦

近代における中国文明と西洋文明の接触が中国の社会構造にいかなる変動をもたらしたかという問題を、政治・経済・文化などさまざまな専門分野から多角的に考察することが、このプロジェクトの課題である。今年度は教育史のアンゲルから、この課題にアプローチする報告が例年になく多くを占めた。若い研究者の関心が教育の分野に向いていることをうかがわせる。また、農村の社会変動や都市の社会史、さらに政治史、外交史などの分野でも注目すべき報告が続いた。

なお七月から半年間、中国社会科学院近代史研究所の楊天石先生に客員としてお越しいただき、中国近代化に関する日中両国の共同研究に尽力していた。

漢字情報基礎論の試み

班長 武田時昌

近年、パソコンが急速に普及し、インターネットによる情報のやり取りが活発に行われるようになって、人文系の研究スタイルも大きく変わろうとしている。

独自の文献考証の方法論を確立してきた中国学においても、これまで研究者の手作業に頼ってきた資料の整理や索引作りは、コンピュータ処理で迅速に

行えるようになった。また、電子化テキストは加速度的に増加しており、これまでの書物のあり方を激変させるところまできている。

ところが、漢籍の場合には、現行の文字コードにはない外字があったり、多くの異体字があるなど、漢字のコード化に関するいくつかの難点があり、漢籍のデータベース化に大きな支障となっている。また、テキスト校勘、インデックス作成を自動化したり、多様な情報を内包しうる階層化したハイパーテキストが十分に開発されているわけではない。

そこで、本研究班では、コンピュータで漢籍を自在に活用できるようにするための諸問題を考察、討議する試行的な研究を行うことにした。とりわけ、文献考証学、音韻学の立場から漢字やテキストの特性を分析し、形・音・義という漢字の属性を内包させたデータベース化のあり方を十分に検討していきたい。そして、IT時代の中国学の新分野として漢字情報学の方角性と可能性を模索し、その基礎論を確立する端緒を開きたいと考えている。

中国近世社会の秩序形成

班長 岩井茂樹

「中国近世社会の秩序形成」共同研究班は、昨年度の開始 이래、年間に二〇回ほどの研究会を開催し、班員による研究報告を積み重ねている。班員個人の関心に即して、さまざまな分野における問題が取り上げられた。

本年は、思想や文化の領域における問題、官制や編纂など政治社会制度にかかわる問題、朝貢や貿易など外交経済制度にかかわる問題にも目が向けられた。制度の生成と運用の過程を分析することは、その時代の人々が懐いていた秩序の認識と、あるべき秩序についての理念とのあいだの距離を測定することを可能にする。現実の秩序についての認識と理念にもとづいて制度が創りだされると同時に、行われた制度が人々の行動を規制する要素としてはたらく。こうした相互作用をくり返すなかで、現実の秩序は安定と動揺、そして再編のリズムを刻むわけである。このように秩序形成の一要素として制度を捉えることによって、規定や枠組みの変遷にとどまらず、制度と社会との相互作用のなかで制度の創出と変化の意味を理解することが可能となるであろう。

人 文 学 報

元代の社会と文化

班長 金文京

前年度に引きつづき本年度も、『事林広記』と『元刊雜劇三十種』の読解、訳注作成を並行しておこなった。

三教交渉の研究

班長 麥谷邦夫

本研究班では、「唐代宗教の研究」研究班に引き続いて、唐神清の『北山録』の会読を進めてきたが、六月をもって読了した。九月からは、元劉大彬編の『茅山志』録金石篇の会読を開始した。『茅山志』録金石篇には、六朝から元にかけての茅山関係の碑文の類が集成されてをり、特に唐以降の碑文は三教交渉の中での茅山道教の位置を解明するうへで極めて重要な資料を含み、この会読を通じて多くの知見が得られるものと期待される。

客員研究部

『帰真総義』の研究

班長 濱田正美

漢語で記されたイスラーム文献は、中国学からもイスラーム学の側からも長らく等閑に付されてきた感があるが、近年その研究は急速に進展し始めた。本研究班は、明末の南京に滞在したインド出身の一スーフィーの口述を、その弟子の張中なる人物が筆録した『帰真総義』の読解を通じて、「漢語によって言表されたイスラーム神秘主義思想」を解明することを目的とする。今年は、真下裕之、中西裕樹、佐藤実、稲葉穰、中西竜也、今松泰が、訳と注釈を準備の上、会読を行った。これまでにほぼ三分の二を読了したが、引用されているペルシア語文献の比定など、今後検討せねばならぬ問題も多い。

Ⅱ 個 人 研 究

人文学研究部

知識と社会制度

阪上 孝

「日本植民地帝国」の経済史的研究

山本 有造

一九世紀における明治維新

佐々木 克

シュメール行政・経済文書の研究

前川 和也

古代インド・ヴェーダ祭式の構造と

歴史的展開の研究

井狩 彌介

フランスの詩学

宇佐美 齊

前近代日本の文明史的研究

横山 俊夫

近代東アジアにおける日本の法と政治

山室 信一

フランス革命と近代的主体の成立

富永 茂樹

近代朝鮮の政治と社会

水野 直樹

南アジアの宗教と社会

田中 雅一

文学理論の研究

大浦 康介

後期ヴェーダ文献の成立史研究

— ブラーフマナからウパニシャッドへ —

藤井 正人

戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク

籠谷 直人

近代天皇制の文化史的研究

高木 博志

人種・エスニシティ論

竹沢 泰子

近代日本の芸術と西洋

高階絵里加

現代社会における生物学・生命科学

加藤 和人

士族の研究

落合 弘樹

共和国の法と道徳 — フランス第三共和政期

における共和思想と新カント派 —

北垣 徹

ポール・ヴァレリーと二〇世紀フラ

ンスの思想

森本 淳生

江戸時代天文暦学の文化史的研究

小林 博行

南アジア・ムスリム社会の社会構造

小牧 幸代

近代日本民俗誌システムの研究

菊地 暁

近世ヨーロッパの国際金融研究

坂本優一郎

東方学研究部

南アジア亜大陸北西地方の歴史考古

学研究

栞山 正進

中国古代の伝承文化研究

小南 一郎

中国美術の様式と意味

曾布川 寛

中国建築の様式・技術・空間

田中 淡

近代中国の綿紡織業

森 時彦

道教思想研究

麥谷 邦夫

敦煌写本の言語史的研究

高田 時雄

中国古代中世の法制

富谷 至

中国の小説、演劇及び講唱文学の演変

金 文京

清代の文化と社会

井波 陵一

近世中国の財政と社会	岩井 茂樹
先秦時代の金文	浅原 達郎
中国科学の基礎理論	武田 時昌
古代中国の考古学研究	岡村 秀典
川西走廊の漢藏諸語の記述言語学的研究	池田 巧
インド・中国における仏教の学術と実践	船山 徹
文字コード理論	安岡 孝一
中国芸術理論研究	宇佐美文理
イスラーム東漸史の研究	稲葉 穰
仏教研究知識ベース — 禅仏教を例として —	
ウィットヘルン・クリスティアン	
中国共産党史の研究	石川 禎浩
中国中世学術史の研究	木島 史雄
中国小学史	森賀 一恵
ムガル朝時代の歴史叙述の研究	眞下 裕之
中国随唐期における疾病認識	
— 『諸病原候論』を軸に —	東郷 俊宏
魏晋南北朝時代の注釈学	古勝 隆一
中国近世の国家支配の研究	古松 崇志
中国仏教絵画の研究	大原 嘉豊
客家語音韻史	中西 裕樹
文字定義情報に基づく文書表現系に	
関する研究	守岡 知彦
中国古代中世の官制史	藤井 律之
モンゴル時代の文化政策と出版活動	宮 紀子

事業概況

夏期公開講座

〈ヒトと環境のサイエンス〉

2001年7月	於 本館大会議室
6日 長寿のサイエンス	
	武田 時昌
ヒトゲノムと新しい人間観	
	加藤 和人
7日 鳥は言葉を発するか — 聞きなしを考	
える —	小林 博行
北京：都市と環境	岩井 茂樹

開所七十二周年記念公開講演会

2001年11月15日	於 本館大会議室
ポール・ヴァレリーと表象の危機	
	森本 淳生
肖像と記憶 — 横山大観《陶靖節》を	
めぐって —	高階 絵里加
明代「嘉靖四十一年賦役黄冊」の語る	
もの	岩井 茂樹

漢字情報研究センター講習会

・2001年度漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）

第1日（10月1日）

図書館と情報システム（講演）

大型計算機センター教授 金澤正憲

漢字と情報システム（講義）

ウィットヘルン・クリスティアン

第2日（10月2日）

WWWによる情報サービス（講義）

大型計算機センター助教授 沢田篤史

Windows上での簡単なWebページ作成（講義・実習）

大型計算機センター助手 岩下武史

Webページ作成（実習）

第3日（10月3日）

最近のデータベースの動向（講義）

大型計算機センター助手 川原 稔

EXCELによるデータベース（講義・実習）

大型計算機センター助教授 小山田耕二

データベース検索（実習）

第4日（10月4日）

TCP/IPとインターネット（講義）

大型計算機センター助手 江原康生

東洋学文献類目とCHINA3（講義・実習）

守岡知彦

村田康彦

テキストデータ処理（実習）

第5日（10月5日）

ネットワークのセキュリティ（講義）

大型計算機センター助教授 高倉弘喜

漢字目録データベースとNACSISデータベース（講演）

- 国立情報学研究所教授 宮澤 彰
- 2001年度漢籍担当職員講習会（初級）
 - 第1日（11月5日）
 - 経 部（講演）
 - 東京大学東洋文化研究所助教授 橋本秀美
 - 目録法（講義）
 - 梶浦 晋
 - 実 習（1）
 - 第2日（11月6日）
 - 史 部（講演）
 - 古松崇志
 - 実 習（2）
 - 第3日（11月7日）
 - 集 部（講義）
 - 立命館大学文学部助教授 上野隆三
 - 実 習（3）
 - 第4日（11月8日）
 - 子 部（講義）
 - 宇佐美文理
 - 実 習（4）
 - 第5日（11月9日）
 - 新学部（講義）
 - 神戸大学文学部教授 森 紀子
 - 実 習（5）

所 員 動 静

- 小山哲（人文学研究部）助教授は大学院文学研究科助教授に配置換（4月1日付）。
- 濱田正美神戸大学文学部教授は、併任教授（文化研究創成研究部門、4月1日～2002年3月31日）。
- 中谷文美岡山大学文学部助教授は、併任助教授（文化研究創成研究部門、4月1日～2002年3月31日）。
- 岩井茂樹（東方学研究部）助教授は当研究所（東方学研究部）教授に昇任（4月1日付）。
- 宇佐美文理信州大学人文学部助教授は当研究所（東方学研究部）助教授に転任（4月1日付）。
- 稲葉穰氏を助教授（東方学研究部）に採用（4月1日付）。
- Christian Wittern氏を助教授（附属漢字情報研究センター）に採用（4月1日付）。
- 坂本優一郎氏を助手（人文学研究部）に採用（4月1日付）。
- 藤井律之氏を助手（東方学研究部）に採用（5月16日付）。
- 石川禎浩神戸大学文学部助教授は当研究所（東方学研究部）助教授に転任（7月1日付）。
- 宮紀子氏を助手（東方学研究部）に採用（7月16日付）。
- 高嶋航（東方学研究部）助手は大学院文学研究科助教授に昇任（10月1日付）。
- 阪上孝（人文学研究部）教授を当研究所長及び附属漢字情報研究センター長に併任（11月1日～2003年3月31日）。
- 村上衛氏を助手（東方学研究部）に採用（11月1日付）。
- 田中祐理子氏を助手（人文学研究部）に採用（12月1日付）。
- 堂山英次郎氏を助手（人文学研究部）に採用（12月1日付）。
- 小牧幸代助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、1月9日成田発、大英図書館に於いて植民地行政資料の調査を行い、1月19日帰国。
- 高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科
- 加藤和人氏を助教授（人文学研究部）に採用（1月16日付）。
- 矢木毅（東方学研究部）助手は宮崎大学教育文化学部助教授に昇任（3月1日付）。
- 狭間直樹（東方学研究部）教授は停年により退職（3月31日付）、孫中山記念館館長に就任（5月22日付）。
- 瀧井一博（人文学研究部）助手は辞任の上（3月31日付）、神戸商科大学助教授に就任。
- 上野成利（人文学研究部）助手は神戸大学国際文化学部助教授に昇任（4月1日付）。
- 安田敏朗（人文学研究部）助手は一橋大学大学院言語社会研究科助教授に昇任（4月1日付）。

- 学研究費補助金により、1月19日大阪発、香港城市大学に於いて南欧所在中国資料に関する研究打ち合わせ及び2001年PNC総会へ出席し、1月21日帰国。
- ・安岡孝一助教授（漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、1月19日大阪発、香港城市大学に於いて石窟碑文情報の収集及び2001年PNC総会へ出席し、1月21日帰国。
 - ・真下裕之助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、1月28日大阪発、アーンドラ・ブラデーシ州政府東洋写本図書館、サーラル・ジャング博物館に於いてインド・イスラーム制度史に関する資料調査を行い、2月5日帰国。
 - ・横山俊夫教授（人文学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、2月2日大阪発、国立ソウル大学校に於いて現代科学術語再検討国際シンポジウム準備会議出席及び発表を行い、2月5日帰国。
 - ・金文京教授（東方学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、2月2日大阪発、国立ソウル大学校に於いて現代科学術語再検討国際シンポジウム準備会議出席及び発表を行い、2月5日帰国。
 - ・武田時昌教授（漢字情報研究センター）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、2月2日大阪発、国立ソウル大学校に於いて現代科学術語再検討国際シンポジウム準備会議出席及び発表を行い、2月5日帰国。
 - ・高嶋航助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、2月3日大阪発、上海社会科学院に於いて中国近代土地制度に関する史料調査及び研究打合せを行い、2月6日帰国。
 - ・曾布川寛教授（東方学研究部）は、2月4日大阪発、故宮博物館及び歴史語言研究所に於いて中国絵画及び中国美術の調査と資料蒐集を行い、2月7日帰国。
 - ・瀧井一博助手（人文学研究部）1月30日大阪発、オーストリア国立図書館、Heinrich von Dehn-Rofelser氏宅、ウィーン大学法制史研究所に於いて明治期御雇いドイツ人法律顧問の研究のため
- の資料調査及び意見交換、カール・ラートゲン関係資料の調査を行い、2月13日帰国。
- ・古勝隆一（東方学研究部）は、文部科学省在外研究員旅費により、2000年4月15日大阪発、台湾中央研究院に於いて台湾所在漢籍の書誌学・目録学的研究を行い、2月14日帰国。
 - ・高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、2月14日大阪発、香港大学及び中国国家図書館に於いて南欧所在中国資料に関する調査研究及び研究打合せを行い、2月18日帰国。
 - ・田中淡教授（東方学研究部）は、2月15日大阪発、ユネスコ北京事務所に於いて大明宮含元殿遺跡保存復元事業専門家会議に出席し、2月18日帰国。
 - ・山本有造教授（人文学研究部）は、2月14日大阪発、スタンフォード大学フーバー研究所に於いて日中戦争軍事史コンファレンス予備会議に出席し、2月19日帰国。
 - ・小牧幸代助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、2月3日大阪発、ジャーマ・ミッリヤ・イスラミヤ大学、ニザームディーン廊及びビジュノール県議会文書館（インド）に於いてインド・イスラームにおける聖者信仰に関する調査を行い、2月24日帰国。
 - ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、2月25日大阪発、中国社会科学院考古研究所、遼寧省文物考古研究所及び文家屯遺跡に於いて遼東半島新石器文化の研究を行い、3月7日帰国。
 - ・池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月5日大阪発、香港城市大学、西南民族学院、四川大学、澳門大学及び澳門文化局に於いてチベット語文語形式に関する文献調査研究打合せ及び資料蒐集を行い、3月18日帰国。
 - ・高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月11日大阪発、ローマ国立中央図書館に於いて南欧所在中国資料に関する研究を行い、3月18日帰国。
 - ・金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学

- 研究費補助金により、3月14日大阪発、台湾中央研究院歴史語言研究所及び国立台湾大学中文系に於いて中国近世俗文学資料の調査を行い、3月18日帰国。
- ・中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月10日大阪発、バーゼルミッション（スイス）に於いて客家語資料の調査を行い、3月19日帰国。
 - ・竹沢泰子助教授（人文学研究部）は文部科学省科学研究費補助金により、3月12日成田発、ワシントン大学及び国勢調査局に於いてアメリカ合衆国の国勢調査に関する調査及び資料収集を行い、3月21日帰国。
 - ・東郷俊宏助手（東方学研究部）は、3月18日大阪発、上海中医薬大学、岳陽医院、曙光医院、上海中医医院及び龍華医院に於いて中国老中医臨床実技の研究を行い、3月29日帰国。
 - ・富谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、3月25日大阪発、スウェーデン・ヘデン財団、王立アカデミー及びライデン大学中国学研究所に於いて流沙出土の文字資料英語版出版打合せ及び木簡に関する特別講演を行い、3月31日帰国。
 - ・宇佐美齊教授（人文学研究部）は、3月7日大阪発、トゥールーズ・ル・ミライル大学（フランス）に於いて20世紀のアヴァンギャルド芸術運動についての講演及び研究打合せを行い、4月8日帰国。
 - ・加藤和人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、4月19日大阪発、エジンバラ国際会議センターに於いてヒトゲノム解析機構第6回年会出席及び調査研究を行い、4月24日帰国。
 - ・高田時雄教授（東方学研究部）は、4月20日大阪発、台湾国家図書館に於いて第二次中文文献資源共建共享合作会議に出席し、4月25日帰国。
 - ・ウィッテルン・クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、5月24日大阪発、東国大学（大韓民国）に於いて2001 EBTI 国際会議に出席し、5月27日帰国。
 - ・池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、5月25日大阪発、台湾中央研究院語言研究所に於いて消滅の危機に瀕した言語の調査についての打合せと資料収集を行い、香港城市大学に於いてチベットビルマ系の少数民族言語の調査打合せ及び資料収集を行い、6月3日帰国。
 - ・ウィッテルン・クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、6月12日大阪発、ニューヨーク大学に於いてACH/ALLC 2001 年度共同年会に出席し、6月18日帰国。
 - ・高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、6月16日大阪発、マルチアーナ図書館（イタリア）に於いて中国学に関する南欧所在資料の調査研究を行い、6月22日帰国。
 - ・田中淡教授（東方学研究部）は、7月14日成田発、大明宮含元殿遺跡に於いて同遺跡保存専門家会議に出席し、7月17日帰国。
 - ・水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、7月16日大阪発、韓国政府記録保存所に於いて旧朝鮮総督府文書の調査・蒐集を行い、7月21日帰国。
 - ・ウィッテルン・クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、7月18日大阪発、中華佛学研究所（台湾）に於いて仏典の電子化における諸問題についての検討を行い、7月26日帰国。
 - ・高田時雄教授（東方学研究部）は、委任経理金により、7月22日大阪発、国立図書館、国立文書館及びアジュダ図書館（ポルトガル）に於いて16-17世紀アジアにおける言語接触とキリスト教布教団の言語戦略に関する文献調査及び資料収集を行い、7月29日帰国。
 - ・真下裕之助手（東方学研究部）は、委任経理金により、7月22日大阪発、国立図書館、国立文書館及びアジュダ図書館（ポルトガル）に於いて16-17世紀アジアにおける言語接触とキリスト教布教団の言語戦略に関する文献調査及び資料収集を行い、7月29日帰国。
 - ・高嶋航助手（東方学研究部）は、5月11日大阪発、上海社会科学院に於いて中国近代女性史の研究及び調査を行い、8月10日帰国。

- ・大原嘉豊助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、7月12日大阪発、法海寺、大同市博物館、雲崗石窟、繁峙県岩山寺、山西省博物館、天龍山石窟、開化寺、永樂寺、陝西省歴史博物館、敦煌市博物館、敦煌莫高窟、トルファン博物館、ベゼクリク石窟、アスターナ墓、トユク石窟、コーラ博物館、クムトラ石窟、キジル石窟及び故宮博物館（中華人民共和国）に於いて中国美術資料収集及び壁書の調査を行い、8月10日帰国。
- ・高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、8月5日大阪発、台湾中央研究院歴史語言研究所、台湾国家図書館及び香港大学に於いて新旧キリスト教ミッションの東アジアにおける出版活動に関する研究打合せ及び資料収集を行い、8月11日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（交通費のみ）により、8月7日大阪発、国立故宮博物館に於いて黃河流域史前玉器學術検討会に出席し発表と調査を行い、8月12日帰国。
- ・中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、7月22日大阪発、中央民族大学（中華人民共和国）に於て「ショオ語」の調査及び資料収集を行い、8月16日帰国。
- ・金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、8月10日大阪発、シンガポール大学図書館に於いて元明代散曲に関する資料収集を行い、シンガポール大学に於いて明代小説國際學術検討会に出席し論文発表及びシンガポール俗曲關係資料調査を行い、8月16日帰国。
- ・藤井律之助手（東方学研究部）は、8月10日大阪発、湖北省博物館に於いて出土文字資料調査、湖南賓館に於いて百年來簡帛発現与研究既長沙吳簡國際學術研付会に参加、景德から上海にかけての遺跡及び上海博物館に於いて出土文字資料の調査及び南朝関連遺跡調査を行い、8月27日帰国。
- ・池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、7月25日大阪発、香港城市大学及び西南民族学院に於いてチベット系少数民族言語にかんする資料収集及び研究打合せ、康定

県文化局に於いて言語調査、西南民族学院、香港城市大学及び香港理工大学に於いて調査資料整理、台湾中央研究院に於いて台湾の少数言語およびチベット系諸語の資料収集とデータ利用の打合せを行い、9月1日帰国。

- ・竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、8月24日成田発、キングズミード・クリケット・スタジアムに於いて移民の人権問題に関する共同研究打合せ及び国連反人種主義世界会議に出席し研究発表をおこない、9月3日帰国。
- ・小牧幸代助手（人文学研究部）は、8月27日大阪発、カイロ、ダマスカス及びターンターに於いてイスラーム世界における聖者信仰と聖遺物の調査を行い、9月15日帰国。
- ・高木博志助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、9月11日大阪発、国立慶州博物館、国立中央博物館及びソウル大学（大韓民国）に於いて植民地期朝鮮に関する資料収集を行い、9月17日帰国。
- ・山本有造教授（人文学研究部）は、9月12日大阪発、雲南省騰越鎮の国殤墓園に於いて国殤墓園に関する調査研究、西南聯合大学旧跡に於いて同旧跡に関する調査研究、中国社会科学院に於いて中日歴史研究中心專家委員会との定期協議を行い、9月19日帰国。
- ・北垣徹助手（人文学研究部）は、8月29日大阪発、レイモン・アロン政治研究センター（フランス）及びフランス国立図書館に於いてフランス第三共和政期における教育思想にかんする文献調査及び資料収集を行い、9月20日帰国。
- ・田中雅一助教授（人文学研究部）は、委任経理金により、8月31日大阪発、サンフランシスコ大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校、イリノイ大学及び国会図書館に於いてアジアの民俗文化についての文献調査を行い、9月20日帰国。
- ・金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、9月6日大阪発、北京図書館、山東大学、南京図書館及び上海図書館に於いて中国近世戯曲・小説・類書の資料調査を行い、9月22日帰国。

- ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、9月18日大阪発、台湾大学理学院地質科学研究所に於いて海峡兩岸古玉学会議で発表及び中国出土玉器の調査を行い、9月22日帰国。
- ・籠谷直人助教授（人文学研究部）は、4月1日大阪発、ロンドン大学政治経済学院に於いて1930年代日英交流史研究を行い、9月23日帰国。
- ・水野直樹教授（人文学研究部）は、9月19日大阪発、延辺大学及び延辺自治州档案馆に於いて「21世紀朝鮮民族古籍の発掘と研究」に関する国際学会議に出席及び資料収集調査を行い、9月26日帰国。
- ・東郷俊宏助手（東方学研究部）は、財団法人京都大学教育研究振興財団助成金により、6月29日大阪発、ケンブリッジ大学ニードム研究所及びライデン大学に於いてヨーロッパにおける鍼灸医学伝播に関する資料蒐集及び調査を行い、9月28日帰国。
- ・中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、10月1日大阪発、海豊県県誌弁公室に於いてショオ語の調査及び資料収集を行い、10月13日帰国。
- ・森時彦教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、10月16日福岡発、武漢市内に於いて記念辛亥革命90周年国際学術討論会にて研究報告、武漢大学及び湖北大学に於いて近代中国に関する研究打合せを行い、10月20日帰国。
- ・ウィッテルン・クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、10月24日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いてバーチャルシステム・マルチメディア（VSMM）国際学会とテキスト・エンコーディング・イニシアティブコンソーシアムの文字問題WGに出席し、10月30日帰国。
- ・守岡知彦助手（漢字情報研究センター）は、10月24日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いてバーチャルシステム・マルチメディア（VSMM）国際学会とテキスト・エンコーディング・イニシアティブコンソーシアムの文字問題WGに出席し、10月30日帰国。
- ・高木博志助教授（人文学研究部）は、11月1日大阪発、国立中央博物館に於いて植民地期文化財保護史料の閲覧及び資料収集を行い、11月3日帰国。
- ・高田時雄教授（東方学研究部）は、11月1日大阪発、中正大学、逢甲大学、故宫博物院（台湾）に於いて21世紀敦煌学国際学術学会に出席し、11月7日帰国。
- ・曾布川寛教授（人文学研究部）は、10月31日大阪発、上海博物館、故宫博物院、国家文物局に於いて中国美術の調査及び資料収集を行い、11月6日帰国。
- ・金文京教授（東方学研究部）は、11月6日大阪発、コルトナ市内に於いて国際会議“Emotions and Analysis of Historical Sowses in China”に出席し研究発表を行い、11月11日帰国。
- ・池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、11月9日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて中国語方言データベースの視察及び資料収集を行い、11月18日帰国。
- ・ウィッテルン・クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、11月14日大阪発、ドモグランドホテルに於いて文字問題に関するTEI総会に出席し、11月19日帰国。
- ・竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、11月7日成田発、日本・ブラジル交流協会、日伯協会、アフリカ奴隷歴史博物館、セラ孤児院、日系老人ホーム（ブラジル）に於いて日系ブラジル人に関する調査及び資料収集を行い、11月26日帰国。
- ・森時彦教授（東方学研究部）は、12月1日大阪発、台湾中央研究院に於いて学術講演及び資料収集を行い、12月12日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、12月8日大阪発、文家屯遺跡（中華人民共和国）に於いて遺跡の踏査、北京大学に於いて集落遺跡に関する調査研究を行い、12月14日帰国。
- ・古勝隆一助手（東方学研究部）は、文部科学省科

学研究費補助金により、12月18日大阪発、北京国家図書館に於いて漢籍に関する調査及び資料蒐集を行い、12月25日帰国。

- ・ウィッテルン・クリスティアン助教授（漢字情報研究センター）は、12月17日大阪発、台湾中央研究院に於いて外字問題を解決するためのワークショップに出席し、12月23日帰国。

外国人研究員

- ・権 泰憶 ソウル大学校人文大学教授
朝鮮に対する日本の植民地支配に関する研究
(文化連関研究客員部門)
受入教官 水野教授
期間 2001年12月11日～3月10日
- ・Ian James McMullen オックスフォード大学
講師
徳川期日本における祝賀儀礼の研究
(文化連関研究客員部門)
受入教官 横山教授
期間 3月6日～5月25日
- ・John Breen ロンドン大学
東洋アフリカ研究院上級講師
幕末期における徳川権力の崩壊過程：儀礼論の観点から
(文化連関研究客員部門)
受入教官 高木助教授
期間 7月3日～12月21日
- ・楊 天石 中国社会科学院近代史研究所研究員
日中近代學術交流史
(文化生成研究客員部門)
受入教官 井波教授
期間 7月15日～2002年1月14日

招へい外国人学者

- ・金 琪燮 釜山大学校人文大学史学科副教授
高麗王朝と鎌倉幕府との交流に関する研究
受入教官 金教授

期間 1月1日～3月1日

- ・胡 坦 中国蔵学研究中心教授
チベット系諸語の声調研究

受入教官 池田助教授

期間 1月31日～2月14日

- ・Alan Kam-Leung Chan

国立シンガポール大学人文社会学部助教授

日本における道家思想研究

受入教官 麥谷教授

期間 3月1日～5月31日

- ・王 開府 国立台湾師範大学国文系教授
四阿含とパーリ五部に関する主体性の思想の研究

受入教官 船山助教授

期間 3月1日～8月31日

- ・黄 留珠 西北大学歴史系教授
秦漢制度史研究

受入教官 富谷教授

期間 3月20日～5月19日

- ・Elizabeth Jane Markham

アーカンソー大学教授

初期の雅楽史の研究 ― 催馬楽を中心に ―

受入教官 横山教授

期間 6月10日～7月31日

- ・Rembrandt Friedrich Worpert

アーカンソー大学教授

初期の雅楽史の研究 ― 唐楽を中心に ―

受入教官 横山教授

期間 6月10日～7月31日

- ・宮 長為 中国社会科学院歴史研究所副研究員
殷周時代の研究

受入教官 岡村助教授

期間 6月15日～7月8日

- ・蔡 榮婷 国立中正大学中国文学系副教授
唐五代時期禪宗「圓相」研究

受入教官 高田教授

期間 7月26日～8月26日

- ・Anders Karlsson ロンドン大学

アジアアフリカ学部講師

後期朝鮮王朝の制度史

受入教官 富谷教授

期間 8月10日～9月21日

- ・呉 文星 台湾師範大学歴史系教授兼系主任
「京都帝国大学と台湾との研究関係」についての
調査研究

受入教官 山本教授

期間 9月1日～11月30日

- ・楊 雨青 中国人民大学歴史系副教授
中国近代教育史に関する調査研究

受入教官 井波教授

期間 9月16日～9月30日

- ・牟 発松 武漢大学人文学院歴史系教授
魏晋南北朝制度史研究

受入教官 富谷教授

期間 12月1日～2002年5月30日

外国人共同研究者

- ・Christopher Allen Ames ミシガン大学
人類学科博士課程
沖縄についての文献調査

受入教官 田中助教授

期間 7月3日～8月24日

外国人研究生

- ・Gabriel Johnson
在日日系ペルー人に関する人類学的研究
受入教官 竹沢助教授
期間 4月1日～2002年3月31日
- ・夏 晶
中江兆民の「小国主義」—小国に徹した独立策
へのアプローチ

受入教官 山室教授

期間 4月1日～9月30日

- ・金 志玪
『黄庭内景経』を中心とする上清派道教研究
受入教官 麥谷教授
期間 10月1日～2002年3月31日

出 版 物

紀要・叢刊

人文学報 第84号（紀要第138冊）

2001年3月30日刊

人文学報 第85号（紀要第139冊）

2001年6月30日刊

東方学報 第72冊（紀要第137冊）

2001年3月30日刊

東洋学文献類目 1998年

2001年3月30日刊

共同研究資料叢刊 第5号

2001年3月30日刊

共同研究資料叢刊 第6号

2001年3月31日刊

所報

人文 第48号

2001年3月31日刊

研究報告その他

中国近代の都市と農村（共同研究報告書）

森 時彦編

2001年3月30日刊

明清時代の音韻學（共同研究報告書）

高田 時雄編

2001年3月31日刊

中國の禮制と禮學（共同研究報告書）

小南 一郎編

2001年10月30日刊

コミュニケーションの社会史（共同研究報告書）

前川 和也編

2001年8月15日刊

アヴェンギャルドの世紀（共同研究報告書）

宇佐美 齊編

2001年11月25日刊